

(連用修飾的) 複文
—フランス語について—

秋廣 尚恵

1. はじめに

フランス語の連用修飾的な複文のアンケートについて、以下に、回答・コメントをまとめる。アンケートの回答にあたっては、筆者が日本語からフランス語の直訳を作成したものをフランス人2名¹に翻訳として適当か否かを確認してもらった。また、他の表現可能性があれば、指摘してもらった。

2. アンケート結果

2.1. 彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。(同時動作)

同一主語による同時動作を表す場合、フランス語ではジェロンディフが用いられる。ジェロンディフとは、動詞の現在分詞に *en* が前置されたもので、主節に対し、「(同)時」「方法」「理由」「条件」「譲歩」などの様々な意味を表す状況補語句を構成することが出来るものである。以下の例において、*en lisant le journal* はジェロンディフであり、主節の動詞 *prendre son repas* と「同時」に行われる動作を表している。

1. Il prend son repas toujours en lisant le journal.

彼 取る 彼の 食事 いつも 読む (ジェロンディフ) 定冠詞 新聞

彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。

ジェロンディフの主語は主節の主語と一致してはいないという文法的制約がある。従って、主語が異なる場合には、必然的に、ジェロンディフを用いなくて、*quand* (…ときに) や *pendant que* (…間に) などを伴う時を表す従属節を用いて表現しなくてはならない。

2. La police l'a arrêté quand il passait la frontière.

定冠詞 警察 彼を 逮捕する (複合過去) トキ 彼が 通る (半過去) 定冠詞 国境

警察は彼が国境を通ろうとしたときに彼を逮捕した。

¹ インフォーマントとして、エクス・マルセイユ大学のフランス語教授法修士課程2年生、および言語学科自動言語処理専攻の博士課程3年生に在籍するフランス人学生2名に協力をお願いした。この2名は日本語科修士課程を修了しており、日仏翻訳のチェックをするのに十分な日本語力も備えている。

また、ジェロンディフの複合的完了形を用いることによって、主節動詞の前に継起する事態を表すこともできる。以下はコーヒー一杯で何時間でも居座ることができた昔のカフェの習慣を説明する文である。ここでは、ジェロンディフの完了形 *ayant commandé* を用いることによって、主節の動詞が表す動作 *pouviez rester à la même table du matin au soir* 「朝から晩まで同じテーブルにいる」に時間的に先立つ動作 *avoir commandé un café* 「コーヒーを注文した」を表している。

3. Vous pouviez rester à la même table du matin au soir en ayant juste commandé un café².

あなたは 出来る (半過去) 残る (原形) ニ 同じ テーブル カラ 朝 マデ 晩 ただ 注文する

(ジェロンディフ完了形) 不定冠詞男性単数 コーヒー

コーヒーを一杯注文しさえすれば、朝から晩まで同じテーブルに居座ることが出来たものだった。

ジェロンディフに関して注意しなければならないのは、主節に対する従属性が強い形式であり、状況補語的な意味(「時」、「理由」、「条件」、「譲歩」)を持つということである。従って、3の例についても、単に、2つの動詞が表わす動作の「継起性」を表しているというだけではなく、主節動詞が表わす事態「何時間でもいられる」に従属する事態としての「条件」(「コーヒーを注文したら」)を表していると解釈される。実際、このジェロンディフは「条件」を表す接続詞 *si* を伴う状況補語節に書き換えること (*si vous avez commandé un café*) が可能である。

2.2. (私は) 昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見て (から)、寝ました. (継起的動作・物語的連鎖)

フランス語において、継起的動作を表す場合に、よく用いられるのは独立節を列挙する方法、もしくは等位接続詞 *et* など で連結させる方法である。また、これには時制の選択も関係している。とりわけ過去時制であった場合、文学的テキストでは単純過去形、それ以外のレジスターでは複合過去形³が使用される傾向がある。

4. Hier soir, je suis rentré chez moi à 10 heures, j'ai regardé un peu la télé et je suis allé me coucher.

昨日 夜, 私は 帰る (複合過去形) 私の家に ニ 10 時, 私は 見る (複合過去形) 少し 定冠詞 テレビ ソシテ 私は 行く (複合過去形) 寝る (原型)

² フランス語の文学作品のコーパス [frantext \(www.frantext.fr\)](http://www.frantext.fr) から引用。

³ 文学的テキストの中では、半過去形が継起的動作の列挙に用いられることもあるが、そのような場合には「語りの半過去 (*imparfait de narration*)」と呼ばれる文体的な特殊な効果が表れる。

私は、昨日、10時に家に帰って、少しテレビを見てから、寝ました。

また、最初の動作を表す動詞を先ほど述べたジェロンディフに変えることも可能であるが、インフォーマントによれば、このように書き換えた場合には、「10時に家に帰るなり、少しテレビを見て、寝てしまった」という意味に解釈されるという。このような解釈が可能な背景には、ジェロンディフの主節との結びつきの強さがうかがわれる。

5. Hier soir, en rentrant chez moi à 10 heures, j'ai regardé un peu la télé, je suis allé me coucher.

昨日 夜 帰る (ジェロンディフ) ニ 私の家 ニ 10時、私は 見る (複合過去) 少し 定冠詞 テレビ、
私は 行く (複合過去) 寝る

昨日は10時に家に帰るなり、テレビを少し見て、寝てしまった。

2.3. (私は) 昨日階段で転んで、怪我をしてしまった。(継起・理由)

「継起・理由」を表す場合に、独立節を単に並列の形式で列挙、もしくは等位接続詞によって結び付けてもいいし (6)、理由を表す接続詞 *parce que* を使用し従属節の形で連結させてもいいし (7)、ジェロンディフにしてもいい (8)。連用修飾句、連用修飾節の主節への統語的な従属性という点で言えば、(6) < (7) < (8) ということになるだろう。つまり、ここでは、従属性の低いほうが「継起性」の意味をより強く表し、従属性の高い方が、「理由」の意味をより強く表すという傾向が観察されるように思われる。

6. Hier je suis tombé dans les escaliers, (et) je me suis blessé.

昨日 私は 転ぶ (複合過去) で 定冠詞 階段 等位接続詞 私は けがをする (複合過去)
私は昨日階段で転んで、怪我をってしまった。

7. Je me suis blessé parce que je suis tombé dans les escaliers.

私は 怪我をする (複合過去) カラ 転ぶ (複合過去) デ 定冠詞 階段
私は昨日階段で転んで、怪我をってしまった。

8. Je me suis blessé en tombant dans les escaliers.

私は 怪我をする (複合過去) 転ぶ (ジェロンディフ) デ 定冠詞 階段
私は昨日階段で転んで、怪我をってしまった。

2.4. 今日父は会社に行って、兄は大学に行った。(異主語)

先ほども指摘したように、ジェロンディフは異主語の場合には使用することができないので、2つの独立節を並列するか (9)、従属節により接続する (10)。10において、使用さ

れる従属接続詞には, *quand* (…ときに), *pendant que* (…間に), *alors que* (…一方で), *tandis que* (…一方で) などがある.

9. *Aujourd'hui aussi, mon père est allé au travail, (et) mon grand frère, à l'université.*

今日 も, 私の 父 行く (複合過去), (ソシテ) 私の 大きい 兄弟, ニ 大学
今日も父は会社に行つて, 兄は大学に (行つた) ⁴.

10. *Aujourd'hui aussi, mon père est allé au travail alors que mon grand frère est allé à l'université.*

今日 も 私の 父 行く (複合過去) ガ, 私の 大きい 兄弟 行く (複合過去) ニ 大学
今日も父は会社に行つて, 兄は大学に行つた.

2.5. (あの人は) 今日 は 帽子 を かぶつて 歩いて いた. (付帯状況)

付帯状況で, 主語の服装や持ち物, 体の一部などに関わるものは, それらを表す名詞句に連体修飾語 (形容詞句や前置詞句) を, 両者を関係づける動詞 (多くの場合はコンピュータ動詞あるいはそれに準ずる動詞) を介さずに, 直接並置して表現する二次的叙述構文 (結果構文) が用いられる. ジェロンディフは使われない.

11. *Aujourd'hui, il marchait avec un chapeau sur la tête.*

今日, 彼は 歩く (半過去) ト 帽子 の 上に 定冠詞単数女性 頭
今日, 彼は帽子をかぶつて歩いて いた.

12. *Le bébé marche les bras en l'air.*

定冠詞単数男性 赤ちゃん 歩く (現在) 定冠詞複数男性 ニ 空気に
赤ちゃんは両手を上にあげて歩く.

2.6. (私は) 休みの日はいつも本を読んだり, テレビを見たりしています. (並列)

並列の構文では, 単純に独立節を並置する場合もあるが, 並列構文のマーカとなる副詞 (*tantôt...tantôt...ある時は…ある時は…*) もよく使用される.

13. *Les jours de congés, tantôt je lis, tantôt je regarde la télé.*

定冠詞複数男性 日 の 休み, …タリ 私は 読む, …タリ 私は 見る 定冠詞単数女性 テレビ
休みの日はいつも本を読んだり, テレビを見たりしています.

⁴ 仏訳では, *est allé* (行つた) は繰り返しになるので, 省略する方がよい.

2.7. 時間がないから、急いで行こう。(理由・カラ)

理由節を導く従属節については、*car* 節、*comme* 節、*parce que* 節、*puisque* 節の4つがあるが、それらのいずれもが、文末にモダリティを持った発話に対し、その発話を行った根拠を述べる、あるいは正当化をするという発話行為を行う用法を持つことが可能である。もちろん、これら4つのそれぞれのニュアンスや用法には違いがあるが、その違いについては、ここでは紙面の都合上論じない。また、平叙文以外のモダリティを伴う主節には、ジェロンディフは結び付くことが出来ない。

14. Dépêchons-nous, car nous avons peu de temps !

急ごう、カラ 私たちは 持つ わずか ノ 時間
時間がないから、急いで行こう。

15. Comme nous avons peu de temps, dépêchons-nous !

カラ 私たちは 持つ わずか ノ 時間、急ごう！
時間がないから、急いで行こう。

16. Dépêchons-nous, parce que nous avons peu de temps !

急ごう、カラ 私たちは 持つ わずか の 時間！
時間がないから、急いで行こう！

17. Puisque nous avons peu de temps, dépêchons-nous !

カラ 私たちは 持つ わずか の 時間、急ごう！
時間がないから、急いで行こう！

2.8. 昨日は頭が痛かったので、いつもより早く寝ました。(理由・ノデ)

伝統的研究、規範文法書などでは、2つの「命題」⁵を結び付け、客観的に主節と従属節の間に成り立つ因果関係を述べるのは、*parce que* 節が持つ本来の機能であると言われてきた。実際、インフォーマントによれば、*parce que* を使った場合には、話者の価値判断や態度を含まない、ニュートラルで、客観的な因果関係を表している印象を受けるという。また、このような *parce que* 節はジェロンディフ (*en ayant des maux de tête*) や前置詞句 (*à cause de maux de tête*) などにより書き換えが可能である。

⁵ 統語論レベルで定義される補語節のこと。「命題 (proposition)」の表すものは事実的な意味内容である。談話の単位としての「発話 (énoncé)」及び「発話行為 (énonciation)」から区別して考える。

18. Hier, je me suis couché plus tôt que d'habitude, parce que j'avais des maux de tête.

昨日、私は 寝る (複合過去) もっと 早く ヨリ いつも、カラ 私は 持つ (半過去) 不定冠詞 痛み ノ 頭
昨日は頭が痛かったので、いつもより早く寝ました。

また、2.7.に見たように、実際には「発話」を結び付けることができる *parce que* 節というものも存在する。2.7.タイプの *parce que* 節は、辞書や規範文法書などでは、非規範的な例、話し言葉に特有の機能拡張された *parce que* 節の例として扱われている。

しかし、実際には話し言葉に観察される *parce que* 節の8割近くが2.7タイプである。記述文法的な観点から見ると、現代フランス語における *parce que* 節は、2.7. タイプも2.8. タイプも両方カバーすることができる非常に多機能的な、ある意味オールマイティ的な理由節のマーカーになっていると言える。

また、*puisque* については、2つの「命題」を結び付けるのではなく、むしろ、2つの「発話」ないしは「発話行為」を結び付ける機能があり、主節を表す「発話」や「発話行為」に対する、正当化や、根拠の表明を行うものであると言われている。実際、インフォーマントによれば、*puisque* を使用した場合には、*parce que* を使用した時には現れなかった、話者の主観的な判断や態度といったニュアンスが感じられるという。日本語にあえて訳すならば、「頭が痛かったんだから (仕方ない. 当然だ)」といった意味になるだろう。

19. Hier, puisque j'avais des maux de tête, je me suis couché plus tôt que d'habitude.

昨日、カラ 私は 持つ (半過去) 不定冠詞 痛み ノ 頭、私は 寝る (複合過去) もっと 早く ヨリ
いつも
昨日は頭が痛かったから、いつもより早く寝てしまった。

また、*car* については、因果関係を表すという点では、*parce que* や *puisque* と同じであるが、*parce que* や *puisque* が従属接続詞であるのに対し、*car* は、*et* (そして)、*mais* (しかし) と同様の等位接続詞であるという点で異なる。*Car* は本来、独立した節を導く機能を持っている。Ducrot (1983) によれば、*car* が談話内に導入するのは、発話者が発話時点において行う「発話行為」なのであって、「命題」ではないという。

20. Hier, je me suis couché plus tôt que d'habitude, car j'avais des maux de tête.

昨日、私は 寝る (複合過去) もっと 早く ヨリ いつも、ナゼナラ 私は 持つ (半過去) 不定冠詞
痛み ノ 頭
昨日、いつもより早く寝た。というのも、頭が痛かったんです。

Car は疑問文や感嘆文などの平叙文以外のモダリティや発話遂行的なマーカ―が表れる独立節を導くことが可能である。Puisque 節の内部にはそうしたマーカ―は表れにくい。Puisque が既に発せられた発話を談話に（再）導入しているに過ぎないのに対し、car は、発話時点において発話者が生成する発話行為そのものを導入することが出来る点で大きく機能が異なる。また、Car はレジスターという点でいえば、フォーマルな書き言葉、あるいはフォーマルな話し言葉にもっぱら観察される接続詞であることも指摘しておきたい。話し言葉、とりわけインフォーマルな日常会話では、car が表れることはほとんどない。その代わりに、用いられるのが、先ほど述べた 2.7 タイプの *parce que* なのである。話し言葉において、car は *parce que* によって取って代われつつあると言われている。もちろん car が話し言葉から完全に駆逐されてしまったわけではなく、話し言葉で、丁寧で格式ばったスタイルを表示する一つ的手段として、car は使用され続けているのである。

最後に、comme 節であるが、基本的に主節の前に表れにくい *parce que* 節の代わりに、主節の前に理由節を置く手段として、一般に用いられるのが、comme 節である。

21. Hier, comme j'avais des maux de têtes, je me suis couché plus tôt que d'habitude.

昨日、ノデ 私は 持つ (半過去) 不定冠詞 痛み の 頭、私は 寝る (複合過去) もっと 早く いつも
昨日は、頭が痛かったので、いつもより早く寝てしまった。

2.9. あの人は本を買いに行った。(趣向／移動の目的)

移動の目的を表す構文は、移動動詞 *aller* (行く)、*venir* (来る) の後に不定詞句を続けることが普通である。

22. Il est allé acheter des livres.

彼は 行く (複合過去) 買う 不定冠詞 本
彼は本を買いに行った。

以上の例において、目的句を *pour* (…ために) という前置詞によって導入することもできそうであるが、インフォーマントによれば、*il est allé pour acheter des livres* は不自然であるという。その場合には、移動動詞 *aller* を *sortir* にする。*Il est sorti pour acheter des livres*。このように、不定詞句に *pour* を入れるか入れないかは、個々の動詞が取りうる構文的特徴による。

2.10. (彼は) 外が良く見えるように窓を開けた。(目的・意図)

フランス語において、目的・意図を示す従属節は接続法を取るが、この例の場合には、主節の主語と従属節の主語が一致してしまうので、前置詞句を用いなくてはならない。

23. Il a ouvert la fenêtre pour bien voir l'extérieur.

彼は 開ける (複合過去) 定冠詞 窓 タメニ よく 見える (原形) 定冠詞 外
彼は外がよく見えるように窓を開けた。

24. Il a ouvert la fenêtre pour que sa femme puisse voir l'extérieur.

彼 開ける (複合過去) タメニ (接続詞) 彼の妻 できる (接続法) 見える (原形) 定冠詞 外
彼は外がよく見えるように窓を開けた。

2.11. ここでは夏になるとよく雨が降ります。(恒常的条件)

恒常的条件を表す場合には条件節ではなく、時を表す副詞節 *quand* を用いるのが普通である。

25. Il pleut beaucoup ici, quand commence l'été.

非人称主語 雨が降る たくさん ここでは、時 始まる 定冠詞 夏
ここでは、夏になるとよく雨が降る。

2.12. 窓を開けると、冷たい風が入って来た。(確定条件・生起)

確定条件・生起についても、通常は時や理由を表す副詞節を用いる。

26. Quand on a ouvert la fenêtre, le vent froid est entré.

時 不定主語 開ける (複合過去) 定冠詞 窓, 定冠詞 風 冷たい 入る (複合過去)
窓を開けると、冷たい風が入って来た。

27. Comme il a beaucoup travaillé, il a réussi son examen.

ノデ 彼 たくさん 勉強する (複合過去), 彼は 成功する (複合過去) 彼の 試験
彼はたくさん勉強したので、試験に合格した。

2.13. 坂を上ると、海が見えた。(確定条件・発見)

確定条件で、事態の発見を主節にとる場合にも、時を表す副詞節によって表す。

28. Quand on monte la pente, on voit la mer.

時 不定主語 上る (現在形) 定冠詞 坂, 不定主語 見える 定冠詞 海
坂を上がると、海が見えた。

2.14. 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。(仮定条件)

仮定条件は、si 節を用いる。この場合、未来についてのごく一般的な仮定条件であるので、直説法現在形を用いる。

29. S'il pleut demain, je n'irai pas là-bas.

モシ 非人称 雨が降る(直説法現在) 明日、私は 否定 行く(未来形) 否定 そこに
明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

2.15. もっと早く起きればよかったなあ。(反実仮想)

実現しなかった過去の事態について述べる場合には、条件法過去形を用いる。またこの場合には、すべきことをしなかったことに対する後悔を表している。このような場合には、devoir (…するべきだ) の条件法過去形を用いるのが常である。

30. J'aurais dû me lever plus tôt.

私は しなくてはならない(条件法過去) 起きる(原形) もっと 早く
もっと早く起きればよかったなあ。

2.16. あんなどころに行かなければよかった。(反実仮想・前件否定)

過去に起こったことについて「するべきではなかった」という後悔を表す場合には、devoir 条件法過去形の否定形を用いる。

31. Je n'aurais pas dû aller à un tel endroit.

私は するべきだ(条件法過去・否定) 二 不定冠詞 あんな 場所
あんなどころに行かなければよかった。

2.17. 1に1を足せば、2になる。(一般的真理)

論理学や数学などで問題になるような、いわゆる論理的仮定条件については、si を使うが、このような簡単な四則計算については、si を使わないで述べることが多い。

32. Si on ajoute 1 à 1, cela donne 2.

モシ 不定主語 足す 1 二 1, それは 与える(になる) 2
1に1を足せば、2になる。

33. 1 et 1, cela fait 2.

1と1, それは する(になる) 2

1 と 1 を足すと 2 になる。

ちなみに、インフォーマントによれば、 $1+1=2$ という数式を読む場合には、

34. 1 plus 1 égale 2

1 プラス 1 イコール 2

1 プラス 1 イコール 2

と読むが、これは、あくまで数式に対応した「読み方」であるので、読み方を文字化したものを見ると奇異に感じるという。

2.18. 駅に着いたら電話をしてください。(仮定条件+働きかけのモダリティ)

フランス語では、働きかけのモダリティがある場合にもそうでない場合にも、仮定条件を表す *si* 節を用いることができる。ただし、このような文については、仮定条件を用いては表現しない。モダリティの問題というよりは、「仮定条件」そのものが持つ意味的な制約による。フランス語では、このような例は「駅に着いた時点で電話をする」という事態を表現すると捉え、むしろ、「時」の条件節を用いる。

35. Appelez-moi, quand vous arrivez à la gare.

電話する (命令形) 私に、トキ あなたが 到着する 二 定冠詞 駅

駅に着いたら電話をしてください。

2.19. 日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。(仮定条件+願望)

「日曜日になったら」を仮定条件節にすることはまれで不自然であるので、ここでは仮定条件節にせず、*dimanche* としておく。だが、一般に、仮定条件節は、願望のモダリティを持った主節と共起することが出来る (例えば、36 に *S'il faisait beau* 「もし天気がよかったら」という仮定条件節を付けることは全く問題がない)。

36. J'aimerais aller au parc avec tout le monde dimanche.

私は したい (条件法現在) 行く (原形) 二 公園 と みんな 日曜日

日曜日になったら、みんなと公園に行きたいなあ。

2.20. 明日雨が降ったら困るなあ。(心配)

「心配」を表すのに特化した形式は存在しない。様々な表現が可能であると思われるがここでは、きわめて直訳的に以下のフランス語の例を挙げておく。

37. Je serais embêté, s'il pleuvait demain.

私は 困らせる (受動態・条件法現在), モシ 非人称 雨が降る (半過去) 明日
明日雨が降ったら困るなあ.

2.21. 家に来るなら, 電話をしてから来てください. (時間的前後関係に則していないナラ条件文)

このような場合には, si 節を用いるのが普通である.

38. Si vous venez chez moi, appelez-moi à l'avance.

モシ あなたが 来る 私のうちに, 電話する (命令) 私に ニ 前もって
家に来るなら, 前もって電話をして下さい.

日本語では, 「家に来るなら, 電話をしてから来て下さい」は自然な文であるが, これをフランス語に直訳したもの *Si vous venez chez moi, appelez-moi et (ensuite) venez* は非常に不自然な文であるとインフォーマントたちは指摘する.

2.22. [もうすぐベルが鳴るので] 鳴ったら, 教えてください. (予想を伴った条件文)

このような場合には, 時の副詞節として表現をする.

39. Quand la cloche sonne, prévenez-moi.

トキ 定冠詞 ベル 鳴る, 教える (命令形) 私に
ベルが鳴ったら, 教えてください.

2.23. [もしかしたらベルが鳴るかもしれないので] もし鳴ったら, 教えてください. (予想を伴わない条件文)

このような場合には si 節を用いて表す.

40. Si la cloche sonne, prévenez-moi

モシ 定冠詞 ベル 鳴る, 教える (命令形) 私に
もしベルが鳴ったら, 教えてください.

2.24. 働かざるもの食うべからず. / 働かない者は, 食べるべきではない. (相関関係)

一般的には, 41 のように表現するが, ことわざなどの特殊な文体では 42 のように関係節の先行詞がない表現もある.

41. **Ceux qui ne travaillent pas ne doivent pas manger.**

不定の人 関係詞 働く (現在形・否定) しなくてはならない (現在形・否定) 食べる
働かないものは食べてはならない.

42. **Qui ne travaille pas ne mange pas.**

関係詞 働く (現在形・否定) 食べる (現在形・否定)
働かざるもの食うべからず.

2.25. もう少しお金があったらなあ. (願望・言い差し)

いわゆる日本語学で用いられる「言い差し」という概念はフランス語では存在しないが、類似した現象として、フランス語学では、*subordonnée orpheline* (主節がない孤児的な従属節のこと) と呼ばれる現象がある。脱従属節化した多くの従属節に関しては、本来従属節の持つ意味の「漂白化」が進んでいるものが観察されるが、特定のモダリティ的な意味(「願望」や「勧誘」など)の「憑依」にまでプロセスが進んでいるのは、おそらく *si* 節だけではないだろうか。

43. **Si j'avais encore plus d'argent!**

モン 私は 持つ (半過去) さらに もっと ノ お金
もっとお金があったらなあ!

2.26. これも食べたら? (勧誘・言い差し)

Si 節の *subordonnée orpheline* の例である。動詞は半過去形で、主節を伴わず独立して現れ、「勧誘」を表す。

44. **Si vous preniez ça aussi ?**

モン あなたは 取る (半過去) それ も
これも食べたらどうですか.

2.27. やりたいなら (自分の) 好きなようにやれば? (つきはなし)

「つきはなし」を表すような *subordonnée orpheline* は見つからなかった。必ず命令形で表される主節を伴う。

45. **Si tu veux le faire, fais le comme tu veux.**

モン 君が 欲する それ する, する (命令) それ ノヨウニ 君が 欲する
そうしたいなら、好きなようにしろ.

2.28. このコップは落としても割れない. (仮定的な逆接)

仮定的な逆接は, *même si*, もしくは *si* によって表すことが出来る.

46. Ce verre ne casse pas même s'il tombe par terre⁶.

この グラスは 壊れる (否定) テモ それが おちる 地面に
このコップは落ちてても割れない.

2.29. このリンゴは高かったのに, ちっとも甘くない. (アクチュアルな仮定)

「*bien que*+接続法」を用いる.

47. Cette pomme n'est pas sucrée, bien qu'elle coûte très cher.

このリンゴ である (否定) 甘い, ノニ それ かかる とても 高い
このリンゴは高いのにもかかわらず 甘くない.

2.30. 彼の家に行ってみたけれども, 彼はいなかった. (異主語の逆接)

異主語であるかどうかはさておき, このような場合には, 独立節を逆接の等位接続詞 *mais* によって結び付ける方がよい. その理由は, 「彼の家に行った」という事態と「彼がいなかった」という事態は必ずしも命題の客観的事実内容の逆接ではないからであると考えられる. 「彼の家に行った」ということは「彼がいるだろうと思っていた」ことを含意している. その語用論的推論によって支えられて「彼はいなかった」を逆接によって結び付ける. このような語用論的推論をも含む逆接は, 独立節の結びつきによるしか表現できないであろう.

48. Je suis allé chez lui, mais il n'était pas là.

私は 行く (複合過去) 家に 彼, シカシ 彼は いる (否定) そこに
私は彼の家に行ったが, 彼はいなかった.

2.31. あの人があるまで, 私はここで待っています. (時間的制限)

ある時点までずっと継続する事態を表す場合には, *jusqu'à ce que* を用いる. 接続法を用いる.

⁶ Ce verre ne casse pas même si on le fait tomber. (このコップは (不定主語が) 落としても割れない) というように異主語の主節と従属節を結び付けても構わない.

49. J'attends ici jusqu'à ce qu'il vienne.

私は 待つ ここで マデ 彼が 来る (接続法)

私は 彼がここに来るまで待っています.

2.32. あの人があるまでに、食事を作っておきますよ。(時間的制限)

ある時点の前に完了する動作を示す場合には、「avant que + 接続法」を用いる.

50. Je préparerai le repas avant qu'il vienne.

私は 支度する 定冠詞 食事 ノマエニ 彼が 来る (接続法)

私はあの人がある前に食事を作っておきます.

3. おわりに

以上がアンケートの回答である。「節 (proposition / clause)」という言語形式によって表される単位には、3つのステータスがある。すなわち、「命題」「発話」「発話行為」である。接続詞 (もしくはコネクター) が結び付けている2つの要素が、どのステータスを持ったものであるかに応じて、接続詞 (コネクター) の機能やそれぞれの守備範囲なども変わってくるという点はフランス語にもよく観察されることが分かった。しかし、それぞれの節がどのステータスを持つのかを判断することは実は非常に困難である。モダリティを示す形式 (疑問文・命令文など) や発話行為的なマーカーがはっきり表れている場合にはそのような問題はあまりないものの、そうした形式が明示されていない場合、とりわけ、語用論的推論やその推論から導かれるニュアンスしか手がかりがない場合には、日本人には区別が難しく、インフォーマントの直感的説明にアンケートを頼らざるを得ない。どこまで客観的な基準によって、3つのステータスを見分けるか、それを見分けるための制約をあまりだせるかという点を今後の研究の課題としたい。

接続法の使用については、フランス語は基本的に語彙的・統語的制約により、ある程度接続法を用いなくてはならない形式が決まりきっている部分が多い。ただし、そうした制約がなく、直説法と接続法の両方が可能である場合には文脈的な意味や発話者の表現意図もそれぞれの選択に影響を加えることになる。

「言い差し」に比較しうる現象として、*subordonnée orpheline* を挙げたが、その中でも脱従属節化が進み、凝結表現として慣用化している条件節の例が観察された。このような現象は、昨今、フランス語学でも多くの研究者の注目を集めている。今後の研究成果が期待される分野である。